

痴漢短編集

モブに痴漢されて
いるのにおねだり
してしまう JK 達
sample

がら堂 / どん丸

A t t e n t i o n

高校生を含む18歳未満は閲覧禁止です。

この話はフィクションです。実在の人物や団体とは一切関係がありません。

なお、この話は犯罪行為を助長するものではありません。決してマネしないでください。

痴漢ダメ、絶対。レイプダメ、絶対。未成年淫行ダメ、絶対。

本書の内容、テキスト、画像等の無断転載・無断使用を固く禁じます。

Unauthorized copying and replication of the contents of this book, text and images are strictly prohibited.

目次

▼路線バスで痴漢される

野暮ったい処女巨乳JKがバスで痴漢されて悦んでしまう話

【場所】 路線バス

【竿役】 口悪おじさん＋その他おじさんたち

【ヒロイン】 小坂文美（こさかかふみ）。処女だが耳年増。おちんちん呼び。

【プレイ】 乳首責め、クリ責め、視姦、処女喪失、中出し、お掃除フェラ

▼雨に降られ寂れたバス停で襲われる

寂れたバス停で知らないおじさんにJKが簡単に身体を許してしまう話

【場所】寂れたバス停

【竿役】身なりの汚いおじさん

【ヒロイン】佐野湖子（さのここ）。ちんぽ呼び。

【プレイ】手マン、クリ責め、クンニ、潮吹き、ガン突きピストン、中出し

▼駅の多目的トイレに連れ込まれる

駅の多目的トイレに連れ込まれたJKが孕ませレイプ懇願させられる話

【場所】 駅の多目的トイレ

【竿役】 口悪おじさん

【ヒロイン】 山口茉莉奈（やまぐちまりな）。気が強い。おちんぼ
呼び。

【プレイ】 拘束、乳首責め、クリ責め、素股、中出し

▼満員電車で担任に叱られる

満員電車で痴漢されやすいJKが担任にお叱り中出しセックス
されてしまう話

【場所】 満員電車、駅ホーム

【竿役】 担任

【ヒロイン】 宮下紬（みやしたつむぎ）。処女。気が弱い。おちん

ちん呼び。

【プレイ】手マン、処女喪失、中出し

▼痴漢掲示板に書き込んだと勘違いされる

空いてる電車で痴漢掲示板に書き込んだと勘違いされたJKが痴漢輪姦される話

【場所】電車

【竿役】オタク集団

【ヒロイン】早瀬千紗（はやせちさ）。ちんぽ呼び。

【プレイ】ハメ撮り、輪姦、乳首責め、クリ責め、イラマチオ、

中出し

▼バスの最終便で睡眠姦される

バスの最終便で寝ていたJKが睡眠姦されていた話

【場所】路線バス

【竿役】サラリーマン数人

【ヒロイン】福留若葉（ふくとめわかば）。おちんちん呼び。

【プレイ】睡眠姦、乳首責め、クリ責め、手マン、ハメ撮り、視姦、輪姦、強制フェラ、中出し

▼夜行バスでキモオタに悪態をつく

夜行バスで隣の席になったキモオタが嫌で悪態ついたJKが犯されてしまう話

【場所】夜行バス

【竿役】キモオタ

【ヒロイン】高橋心愛（たかはしここあ）。メスガキ。ちんぽ呼び。

【プレイ】睡眠姦、乳首責め、キスハメ、中出し

▼電車で痴漢されラブホに連れていかれる

電車で痴漢に寸止めされたJKがラブホに着いて行く話

【場所】電車、ラブホ

【竿役】中年

【ヒロイン】相川ひとり（あいかわひとり）。気弱。処女。おちんちん呼び。

【プレイ】乳首責め、クリ責め、クンニ、手マン、キスハメ、ハメ撮り、中出し

▼夜行バスで援交する

あしながおじさんに夜行バス代を払ってもらったJKが言う事を聞く話

【場所】夜行バス

【竿役】援交相手の中年

【ヒロイン】清水真子（しみずまこ）。おちんぽ呼び。

【プレイ】オナニー、キス、手コキ、強制フェラ、乳首責め、クンニ、手マン、中出し

▼叔父にバイブをハメられて電車に乗る

気の強いJKが大嫌いなおじさんにバイブハメられたまま電車に乗る話

【場所】電車、ホーム

【竿役】叔父、中年サラリーマン

【ヒロイン】青山深雪（あおやまみゆき）。気が強い。おちんぽ呼び。
び。

【プレイ】バイブ、強制連続絶頂、クンニ、中出し

▼痴漢専用車両で全裸拘束される

知らずに痴漢専用車両に乗ったJKが女の子を助けたら代わりに全裸拘束されてしまう話

【場所】電車

【竿役】たくさん

【ヒロイン】楯井美乃（たていみの）。処女。ちんぽ呼び。

【プレイ】全裸拘束、輪姦、乳首責め、クリ責め、クンニ、手マン、イラマチオ、中出し

▼痴漢されるのをクラスメイト達に見られる

痴漢に中出しされるのをクラスメイトに見られたJKが都合のいいハメ穴にされてしまう話

【場所】電車、校舎裏、学校のトイレ

【竿役】クラスメイトたち、中年

【ヒロイン】堀内結花（ほりうちゆか）。おちんちん呼び。

【プレイ】視姦、輪姦、アナル責め、二穴責め、中出し

▼新幹線で媚薬を盛られる

新幹線でおじさんたちに媚薬を盛られたJKがオナニーしておねだりしてしまう話

【場所】新幹線

【竿役】中年集団

【ヒロイン】小泉菜穂（こいずみなほ）。おちんちん呼び。

【プレイ】媚薬、オナニー、フェラ、視姦、輪姦、ハメ撮り、強

制連続絶頂、中出し

路線バスで痴漢される

「んんっ……っ♡」

学校の帰り、いつもより早く来たバスの中で身体をぶるりと震わせながら、小坂こさか文美ふみは与えられる快感に甘い声を必死で我慢していた。

文美は度のきつい眼鏡をかけ真っ黒の髪をおさげにしたやぼったい女子高生である。しかし制服の上からでもわかる大きな胸が男の劣情を誘い、野暮ったい見た目と合わさってか、痴漢に狙われやすかった。

未だ彼氏のいたことのない文美だが、読書が趣味であるため耳年

増であり、性的なことに興味がないわけではなかった。

電車に乗るたび尻を撫でられたり、肘で胸を押されたり、尻に硬いものを擦り付けられたりすることで、文美は段々不快感より性への興味やほんの少しの快感が増していき、痴漢の手で熱くされた身体を家で自分で慰めるようになっていった。

そのせいか、段々痴漢に抵抗するどころか、自分の身体に触れようとすする痴漢にもっとももっとと身体を擦り付ける悪癖がついてしま
い。

文美は今、エスカレーターした痴漢に上も下も下着の中に手を入れられて、大事なところを指先でこねられていた。

「んあっ♡」

ぷっくりと膨らんだ乳首とクリトリスを同じように親指と人差し

指で摘まれて、自分でやっている時とは全く別物の快感に文美は喘いでしまう。

上も下も突起を摘まれたままクニクニと潰されるように捏ねられ、文美は必死で目の前のポールを両手で掴んだ。

「あ、やあつ……♡」

文美が太ももを擦り合わせるようにもじもじすると、痴漢は文美の制服をブラジャーごと思い切り上げた。

野暮ったい文美にはアンバランスな大きな生乳がバスの中でぶると揺れ文美は羞恥に目を潤ませるが、服を戻そうとはしなかった。「もつとすごいことをされるかもしれない」という興奮が文美から抵抗心を奪ったのだ。

何もしない文美に調子に乗ったのか、痴漢は文美のスカートのフ

アスナーを下ろした。ぼさり、と床にスカートが落ち、文美の下半身を守るものは飾り気のない白のショーツだけとなってしまふ。

流石に焦った文美だが、男は文美からショーツさえ奪ってしまい、文美は半裸より全裸の方が近いような格好になってしまった。

「やあんっ♡」

痴漢は再び乳首とクリトリスを摘まれて身体をくねられせる。さきほどより襲ってくる快感が強くなったような気がして、文美は息を荒げた。

幸運にも目の前の席に座っている人は寝ているし、痴漢の身体は大きく文美をすっぽりと覆っているの、このほぼ全裸が周りに見られることはないだろう。

——文美が喘ぎ声を上げなければ、だが。

「あっ♡ ああっ♡」

意識はせずとも、バスの中でこんな格好にさせられ知らない男に愛撫されているという非日常極まりない状況に、文美は段々喘ぎ声を我慢しなくなっていく。

「や、あ♡ イっ、イっちやあツツ♡♡」

指先で挟まれる捏ねられ潰された乳首とクリトリスが解放されるとそこは真っ赤に充血しており、痴漢が爪先でカリツと引っ掛けるだけで、文美は達してしまった。

続

雨に降られ寂れたバス停で襲われる

「んんん♡ おまんこくちゆくちゆしちやだめえ♡」

「くちゆくちゆ言ってるのはオマンコがびしよびしよに濡れてるか
らだろ？ それは君がエッチなせいじゃないか」

「ちがう♡ ちがうよお♡ 雨すごいから♡ 雨で濡れちゃったの
お♡」

夏に近づいてはいるが雨が強く肌寒い梅雨の日のこと。

人気のない寂れたバス停の待合所で、佐野湖子さのこは後ろから見知らぬ髭面の中年にショーツの中に手を入れられ、太い指で割れ目をいじられていた。

「オマンコが雨で濡れるわけないだろ。パンツ脱いでオマンコに雨

当たるとようにしたのか？ ド変態め！」

「そんなことしてないもんっ♡」

「じゃあこれはマン汁なんだな？」

「あうう♡ だって♡ だってえ♡ おまんこよしよしされたらみんなおまんこびしょびしょになっちゃうもん♡ わたしだけじゃないもん♡」

まだ時間は五時をすぎたところだが空は厚い雲が覆い、強く雨が降っているせいで辺りは薄暗く、市街地からは離れた小高い山の中腹にあるバス停なので、こんなことをしていても誰にも気付かれることはない。車が通っても雨のせいで見られることはないだろう。バスだってここは二時間に一本しか停まらないし、それまであと一時間半もあるのだ。

なぜこんな場所に湖子がいるのかと言うと、単純に通学路だからである。高校から電車で三十分の駅から徒歩十五分のところにあるのがこのバス停で、ここからまた三十分バスに乗って、十分歩いてやっと家に着く。わざわざ遠い学校に通っているのではなく一番近くてそこなのだ。

今日は学校を出て乗った電車が遅延したせいで一本前のバスの時間間に合わず、このバス停で一時間半待つことになったのだ。田舎は駅周りに時間を潰せる場所なんてないので、この寂れたバス停で座って本を読むくらいしかできない。

「やアンツ♡ クリこすっちやだあっ♡」

「こんなぶつくり腫れてるのに無視したほうが可哀想じゃないか!」
「あっあっあっ♡ だめなのっ♡ クリだめなのおっ♡」

「マンコもつとびしよびしよになってきたぞ。どこがだめなんだ!」
「やあツ♡　ぐりぐりやめてツ♡　グリグリやめてええっ♡」

傘をさしても濡れるくらいの天気で、湖子がバス停にたどり着いた時にはもうスカートも靴下もびしよびしよになっていた。ワイシヤツもだいぶ濡れて下着ははつきりと透けていたので、湖子は持ち帰ろうとしていた体操服に着替えようとした。

このバス停で人に会ったことのない湖子は少しだけ躊躇したものの、思い切って制服を脱いだ。体を纏うものがブラジャーとショーツと靴下だけになってタオルで体を拭いていた時、身なりの汚い男が現れた。

男は湖子の下着姿にギョツとした様子だったが、湖子の背後から抱きつき、ショーツの中に手を入れたのである。

「あっあっあっ♡　だめ♡　そんなこすっちやあっ♡　イツちやう♡　イツちやうううう♡　あ————っ♡」

「おいおい、潮吹いてイクのかよ。どんだけスケベなんだ！」
クリトリスを太い指で強く速く擦られた湖子は潮を吹きながら達し、座り込みそうになるのを男が支えてベンチに座らせた。

そのまま男はぼうっとする湖子の両足を上げるとショーツを引き抜きポケットに入れる。ブラジャーと靴下しか纏っていない湖子は、甘い声を漏らしながらさらされるがままで抵抗しなかった。

続

駅の多目的トイレに連れ込まれる

「いや、離してっ!!」

「うるせえ、レイプ誘ってたのはそっちだろうがっ!」

「はあっ? 何言ってるのっ!!」

「電車の中でかい乳ずっと押し付けやがって……!」

「きやあっ!」

とある日の夜、山口茉莉奈やまぐちまりなは高校の帰りの電車を降りてあまり人気がない駅を歩いていたところ、急に腕を掴まれて、多目的トイレに連れ込まれてしまった。

気の強い茉莉奈は自分を多目的トイレに連れ込んだ柄の悪そうな中年オヤジを睨みつけるが、その男は微塵も気にせず、茉莉奈を壁

に押しえつけて胸に手を伸ばす。

「はあ、はあ、この乳か、俺に押し付けてたのは……！」

「ひっ、いや、やめて、離してっ！」

「ちと大人しくしてろ」

「ひっ、いや、やめてっ！」

暴れようとする茉莉奈を男は器用に手際よくベルトで手すりに拘束し、茉莉奈の着ているブレザーやワイシャツのボタンを外し、脱がしていく。

上半身がリボンとブラジャーだけになってしまった茉莉奈はさすがに怯え、気丈ではいられなくなってしまおう。

「いや、いやあっ……！」

「はあはあ、高校生がしてていい乳じゃねえよ……！」

「やめて、おねがい、いや、いやっ……！」

「こりゃあ大人がしつけてやらねえとな……おらっ！」

ついに男がブラジャーを外すと、茉莉奈の年齢に見合わぬ大きな乳房がぶるんっ♡と外気に晒されてしまった。

Hカップのその胸は、大きさのわりに形が整っていて、重力に負けずつんと上を向いている。先端はほんのりと薄いピンク色で、白い乳房とそう色が変わらない。肌が薄く、触らずとも柔らかいということがわかる乳房だ。

男はその茉莉奈の生乳を見て、ハアハアと息を荒くする。

「いや、見ないで、やめてえ……！」

「こんなエロい乳しやがって、見て欲しかったんだろっがっ」

「ちがう、ちがうの、いや、許してっ……！」

「はははっ、そうやって大人しくしてりやかわいいじゃねえか、ぢゅっぽおっ♡」

「んああっ!!」

しくしくと泣き出しそんな茉莉奈に男は笑うと、いきなりその乳房にしゃぶりついた。

「いや、やめて、やめてえ、ああっ……♡」

「ぢゅぼぢゅぼ♡ ぢるるるっ♡」

「やだ、やだ、やあんっ♡ 乳首、いやあっ♡」

「ぢゆるるるるるるるるるるるっ♡」

「ああくんっ♡」

無理矢理されていると言うのに、身体が敏感な茉莉奈はすぐに甘い声をあげてしまう。

そのせいで「やめて」も「やだ」も「いや」も、「シて」のような意味を持ってしまっていた。

男にしゃぶられた乳房は唾液でべっとり濡れ、乳首は赤く染まり、ツンと尖っている。非常にいやらしい乳房だ。

「ほら、でけえから自分でも見えるだろ？　乳首がもうおっ勃ってやがる」

「やだ、やだあつ……あんっ♡」

「はっ、エロい声出しやがって、何が嫌なんだよ」

続

満員電車で担任に叱られる

「んっ……♡」

また痴漢だ、と宮下紬は泣きそうになりながらも、スカートの中に入り込んだ手をとめることはできない。

大きくゴツく熱い手のひらは、紬の柔らかい尻を好き勝手にもにゅもにゅ♡ と揉んでくるが、毎日くらいの頻度で痴漢に遭っている紬は痴漢に性開発されてしまっている、その痴漢行為に感じてしまっていた。

紬とはある高校に通う女子生徒だ。地味で大人しいが巨乳でドエロイ身体をしているので男子生徒に声はかけられないもののオカズにされているし、よく痴漢や不審者に狙われている。

特に毎朝乗っている満員電車ではほぼ必ずと言っていいほど痴漢に遭っているのだが、気が弱いせいでやめてくださいとは言えず、ぎゅうぎゅうの満員電車なので離れることもできず、なんとか人波に乗って電車を降りて次の電車を待つとか車両を変えるとかしか対策ができなかった。空いてる電車に乗ろうとしても、この辺りは朝六時半から十時ごろまで満員電車が続くので無理だ。

そのため、紬はよく遅刻をして担任の浜谷に怒られていた。浜谷は女子生徒に嫌われるような汚くてブサイクでスケベな中年だが、気の弱い紬は担任に対して悪感情を表したことがない。

なので、段々浜谷は「宮下は俺の気を引きたくて遅刻しているんだな」と勘違いした。もちろんそんなことはない。初めはなぜ遅刻しているのか恥ずかしくて言えなかった紬だが、流星に何度も繰り返

返しているのに言わないわけにはいかないと浜谷に痴漢されていて、と伝えたのだが、浜谷はやはり「俺に痴漢されたいってことだな」と勘違いをした。

その結果、浜谷は、紬に痴漢することにしたのだ。

「んんっ……♡」

スカートの中で尻を好き勝手揉んでいた手は、ショーツを指で引っ掛けてぎゅっ！と上に引っ張った。割れ目に食い込んだショーツは淫核を強く刺激し、紬は腰をもじもじと震わせた。

その痴漢行為を働いているのが、浜谷である。

今日、浜谷は一日休みを取った。一日かけて紬にあれこれするためだ。遅刻を叱るたびに紬がどの電車のどの位置に乗っているかは聞いているので、紬の後ろにぴったりくっつくのは容易だった。

「んっ、んっ♡」

リズミカルにショーツをぎゅっぎゅっ！と引っ張られ、紬は顔を真っ赤にさせて感じてしまう。浜谷は紬の後ろにいるが耳が真っ赤に染まっているので感じていることに気づいていた。

「あっ！」

ショーツを横にずらしにゆるん♡と膣内に入ってきた指に、紬は目を見開く。慌てて自分の口を両手で塞ぐが、やはり抵抗はしなかった。

「——っっ♡♡」

ぢゅぽぢゅぽ♡と膣内の指がピストンを始めたので、紬は声を出さないように必死だ。

痴漢されやすいとはいえ、ここまでされたのは紬は初めてだ。つ

いでに言うのと処女なので、ここに何かを突っ込まれたのも初めて。自分ではやったことあるが。

それなのに、ひどく感じてしまっていた。もはや痴漢に対する嫌悪感はない。

「ーっ、んうっ、っっ♡♡」

続

痴漢揭示板に書き込んだと勘違いされる

「んっ、やつ……♡」

今日は部活が休みだったため、早瀬千紗はやせちさは帰宅ラッシュ前で空いている電車に乗ってロングシートに座ってスマホを弄りながら「空いてる電車はいいなあ」と思っていた。いつもは部活帰りで帰宅ラッシュにぶつかって満員電車に乗って帰っているので、それだけで疲れが増すのだ。

千紗が乗った次の駅で見るからにオタクっぽい男たちがたくさん乗ってきて、千紗は「何かイベントでもあったのかな」とぼんやり思っていた。しかしそのオタクたちが自分の隣や前に集まってきたこれはおかしい、と思ったのもつかの間、腕や足を掴まれて、胸や

太ももを汗ばんだ手のひらで好き勝手揉まれてしまった。

つまり、集団痴漢である。

「いやあ、やめてっ……んんっ♡」

「ああ、すごい、本物のJKだあっ……♡」

「おっぱい大きいっ♡ 三次元も捨てたもんじゃないよっ♡」

「太もももすべすべムチムチで最高でござる♡」

「はあああ、こんなかわいい子が、痴漢して欲しいって思ってるなんて、すごい世の中だなあ……♡」

「なっ……!!」

敏感な千紗は知らないオタク集団に急にレイプされそうになって、いるのに感じてしまっていたのだが、聞こえたことにびっくりして、それを言ったオタクをぎよっとして見つめた。

「な、なにそれっ！ 私、痴漢して欲しいなんて思っ
てないですっ！」
千紗の言葉に一斉に手を止めて顔を見合わせたオタクたちは、ニ
ヤニヤしてまた手を動かし始める。

「ふふっ、わかってるよ♡ 『嫌がるフリをするけど本当は嫌じゃ
ないので最後までしてください♡ 無理矢理が好きなんです♡』だ
よね♡」

「何言って、あんっ♡」

「ほら、エッチな声出しちゃって、かわいいなあ♡」

「十八禁の痴漢掲示板に書き込みするようないけないJKは、たっ
ぷりお仕置きしようね♡」

「ひっ、いや、きやああっ：！」

両側から掴まれて力任せに引っ張られたブラウスは、派手にボタ

ンを飛ばしてほぼ意味のない布切れとなってしまう。

現れた大きな薄ピンク色のブラジャーに包まれた乳房はHカップと大きい。

オタクたちは「おおっ♡」と興奮しきった声を上げた。

さて、ネット上には『痴漢掲示板』というものが存在する。痴漢したい男たちと痴漢されたい女たちが（時には性別が逆のこともあるが）集まって、「○○線の○○駅○時○分発の電車の○号車の○番ドア付近にいるから痴漢してください♡」「OK行きます」とやりとりをする掲示板である。その特性上十八禁だ。

このオタクたちはつい最近までその掲示板のロム専だったのだが、この度ついに痴漢する覚悟を決めた。

そして、つい昨日、見つけたのだ。「度須線の化戸駅十六時四分発

の電車の四号車の二番ドア付近に座ります♡ 得露高校の制服を着たHカップのJKです♡ 処女だし、こんなこと初めてなので緊張しています♡ 嫌がるフリをするけど本当は嫌じゃないので最後までしてください♡ 無理矢理が好きなんです♡ 痴漢さんに処女捧げさせてください♡ 乳首とクリが性感帯です♡ 生ハメ中出しもOKです♡ 私のこと気に入ってくれたらお持ち帰りもぜひ♡ 一緒に楽しみましょう♡」というエロエロ書き込みを。そしてここにやってきたわけである。

続

バスの最終便で睡眠姦される

金曜日の夜十一時。路線バスの最終便はガラガラで、女子高生一人と、サラリーマンが三人しか乗っていなかった。

女子高生の福留若葉ふくとめわかばは、塾帰りだった。一番後ろの端の席に座って、眠ってしまったている。セーラー服を着崩さずに着ているが、少しキツめなのか、大きな胸をしているのがよくわかる。

その斜め前に座っていた一人の中年サラリーマン、下村は、ちらりと若菜の様子を見ると、ゆっくりと立ち上がって若菜の隣に座りなおした。若菜は熟睡してしまっているのか、びっくりともしない。

下村は、スカートの上からでもわかる、むっちりとした若菜の太ももの上に手を置いた。それからそのまま数秒動かず、下村はじっ

と若菜を見ていたが、起きる様子がないので、そつとスカートを捲り上げていった。

「……………」

スカートが足の付け根までいって、若菜の白い太ももが露になって、白いショーツがちらりとぞく。下村はじつとりと汗ばんだ自分の手のひらで、ゆっくりその太ももを撫でた。注意深く若菜の様子を見るが、やはり起きないようだ。そしてさらにスカートを捲り上げる。今度は白いレースのついた下着がはつきりと見えた。下村は太もものつけ根から上へと指を移動させていく。すべすべしていて柔らかい。

「んう……」

さすがに起きたかと思ったが、若菜は息を漏らしただけだった。

下村はそのまましばらく若菜の太ももを触っていたが、やがてセーラー服の裾に手をかけた。それを胸の上まで捲り上げる。シヨートと同じ、白いレースのフロントホックのブラジャーに、苦しそうに大きな乳房がおさまっていた。サイズが合っていないのだろう。大ききの割に垂れずに前に飛び出た乳房のおかげで、セーラー服は胸の上でしっかりと止まる。バスの中はとても静かで、下村は自分の息が荒くならないよう、細心の注意を払った。下村の両手が若菜の胸に伸びる。片手では収まらないサイズの胸を下村はぐにぐにゆくと揉み始めた。

「ふあ……あ」

若菜の口から声が漏れる。しかしまだ眠っているようで、目は閉じたままだった。下村は震えそうになる手でフロントホックを外し

た。その瞬間ブラジャーはやつと解放されたように両側に弾け、ぶるんっ♡と飛び出て来た乳房は、予想以上に大きく、綺麗で、いやらしかった。先端は薄いピンク色で、使い込まれていないことがわかる。下村はその乳房を大きく見開いた目でじつと見ていたが、ハツと我に返って若菜の様子を見る。起きていなかった。ホツとして、もう一度乳房を揉み始める。ブラジャーに包まれていた時とは違う。ずっしりとした重みと手のひらに吸い付くような感触があった。下村は夢中になって乳房を揉んでいる。若菜の乳首がだんだん固くなってきたことに気がついた。

「はあっ……はあっ……」

下村は興奮して呼吸が乱れ始めていた。親指の腹で乳首を押し潰したり、つまんで転がしたりするうちに、ぶつくりと勃起してきた。

勃起した乳首は真つ赤で非常にいやらしかった。親指と人差し指でそれを摘まんで引つ張る。

「んうっ……♡」

甘い吐息と同時に、若菜の身体が震えて、下村ははっと手を離して少し若菜から離れる。しかし、若菜は起きていなかった。

ごくりと唾を飲み込んだ下村は、両手で若菜の大きな乳房を持ち上げ挟み、口を大きく上げて、乳首にしゃぶりついた。

ぢゆるる♡ ぢゆるるくくく♡ ぢゆるるくくく♡ れろお♡

続

夜行バスでキモオタに悪態をつく

「うわっ、最悪……」

とある金曜日の夜、高橋心愛たかはしこころは夜行バスに乗っていた。好きなアイドルのライブに行くためである。高校生ゆえあまりお金はないので安い夜行バスを予約したので横四列のシートは隣と密着していてカーテンなんかもないのだが、隣の席が見るからに「キモオタ」という風態だったので、親にお金借りればよかったかも、と後悔する。

しかし満席のため席を変えてもらう事はできず、渋々そのキモオタの隣に入る。巨デブのせいで一旦どいてももらわないと入ることができなかった。そしてやっとの思いで自分の座席に座ると、隣のキ

モオタがこっちはみ出している。しかもなんか臭い。心愛が隠してもせずに舌打ちをすると、隣のキモオタはびくりと身体を震わせた。それもキモイと心愛は顔を顰めた。

心愛は不機嫌そうに窓に頭を当ててもたれかかる。寝てしまおうかとも思ったが眠れなかった。

「あ、あの……」

イライラしている心愛に話しかけてきたのは、当然と言うべきか、隣のキモオタだった。心愛は無視を決め込む。

「……………あ……………え……………」

声が小さい上にボソボソ喋るせいで何を言っているのか聞き取れない。心愛の怒りのボルテージが最高潮に達した。心愛はキレやすいので。

「マジキモイんだけど。私に話しかけないで」

心愛の言葉にキモオタの顔色が青くなったり赤くなったりする。だがキモオタはすぐに俯いて黙ってしまった。

「言い返せもしないの？ ダツサ」

ふん、と心愛はキモオタから顔をそらすと、イヤホンを耳に挿して目を瞑った。キモオタと密着している右腕がじつとりとして気持ち悪かった。

ちなみに、心愛は吊り目でキツく見えるものの童顔気味の美少女で、髪はツインテール。小柄な身長に合わない大きな胸とむっちりとした尻や太ももで、服装はパツンパツンのTシャツに、下着がはみ出しかねない短いホットパンツに、太ももの肉をおいしそうに乘せるピチピチニーハイ、という格好だった。

そしてこのキモオタは、メスガキエロ同人誌で死ぬほど抜いていた。

「はあ、はあ、この、生意気なメスガキツ……！ わからせてやる、わからせてやるからなっ……！」

(?! な、なにつ?!)

数時間後、ふと目を覚ました心愛は、身を襲う感覚に驚愕した。今心愛は座席に直角になるように仰向けに寝かされていて、自分の上であるキモオタがハツハア言いながら揺れていたのだ。恐る恐る視線を下に向けると、着ていたTシャツは胸の上まで剥かれ、ブラジャーは消え、ショーツパンツとショーツも消えていて、そして、大事なところに太いものがずぼずぼと出たり入ったりしていた。

「んんんんんっっ!!」

思わず叫ぼうとした心愛だが、口が何かに塞がれていて声が出ない。はっと腕を動かそうとするが、腕は何かに結びつけられているようで、動けない。

「あ、起きたかなあ？」

ニチャア、と気持ち悪い笑みを浮かべながら声をかけてきたのは、自分の上で腰を振っているキモオタだ。この男にレイプされているんだ、と思った瞬間、心愛の身体中に怖気が走った。

「君みたいなたを舐めてるメスガキにはこうやってわからせない
とダメみたいだからねえ」

続

電車で痴漢されラブホに連れていかれる

「ハアハア、君、かわいいねえ……♡」

高校の帰り。いつもと同じ電車に乗っているのに、相川あいかわほとりは痴漢に遭っていた。スカートの中に入っている手が気持ち悪いが、気弱なほとりは抵抗できずふるふる震えている。そういうところが痴漢の格好の的なのだろう。

「小さいのにこんなにお尻ムチムチでエッチすぎるよ……♡」

耳元でねっとり囁かれて、ほとりは目の前のポールを両手で握り締めながらぎゅっと目を瞑る。ショーツ越しに尻を撫でる手は、内股に入り込んで、内腿の肉をたぶたぶと弄んでいた。

「次の駅で降りようか？　そうしたらいっぱい可愛がってあげるよ

……♡」

この痴漢から逃げるために次の駅で一旦降りる予定だったほとりは、男の言葉にぎくりと固まる。痴漢はそんなことに気が付かずに、片手をほとりのブラウスの中に入れてきた。

「あっ……！」

「お尻だけじゃなくておっぱいも可愛がってあげるからねえ♡」

ブラジャーの下に手を入れられて、胸をむにゆりと揉まれる。ほとりは小さい割に、爆乳と呼ばれる胸のサイズの持ち主だった。男の大きな手からはみだすサイズの乳房に男は驚いたようだが、それが気に入ったようで何度も何度も形が変わるほど強く掴んできた。

「いやあっ……！」

乳首には触らず、ただ感触を楽しむようなその動きにほとりは嫌悪感を示す。しかし痴漢の手は止まらない。

「体は小さいのにこんなにおっぱいが大きくて、えっちだねえ♡
毎日かわいがってあげたいぐらいだよ♡」

そう言いながらも、男の指先は一向に乳首を触ってくれない。その間ももう片方の手で尻を撫で回され、ほとりは涙目になる。

（やだよう、だれかたすけてえっ……！）

そう思っても、ほとりは小さいせいで満員電車の人混みに埋もれて、誰の視界にも入っていないように助けなど望めない。男は更にほつりを責める動きを強めた。

「はあはあ、本当に可愛いなあ、君……♡ スー、ハー……♡ イ匂いもするし……♡」

すんすんと鼻息荒く男が嗅いでくる。そしてとうとう、男の指先が乳輪に触れた瞬間——

「くくくくっつ!!」

今まで触れられなかった乳首をぎゅむうっ♡ と摘まれ、びくんとほとりの体が跳ね上がった。それどころかそのままぐにいと押し潰される。

「んんっ♡ くっ♡」

こりこりと両方の乳首を捏ねられ、きっきまでの怯えた声とは一転、ほとりから甘い声が漏れ出す。小さな手で一生懸命自分の口を塞いでいるが、男にははつきりとほとりの声が聞こえた。

「乳首ちゃん気持ちいいのかなあ？ ふひひっ♡ かわいい声で鳴いてるね♡」

今度は優しくすりすり擦られる。敏感になったそこを慰めるような優しい刺激だが、それでも今のほとりにとっては充分すぎるほどの快感だった。

（なんでっ……？ きもちよくなんてなりたくないの……）

「あれれえ？ 腰揺れてるよお？ おまんこキュンキュンしてるの？」

「ちがっ……」

慌てて否定するが、ほとりは自分のお尻に当たる硬いモノにぎりとする。

続

夜行バスで援交する

横三列シートが一番後ろの窓際席。高校生の清水真子は、『あしながおじさん』にその席を手配してもらっていた。遊びに行くのに夜行バスを使おうとした真子は、高校生ゆえにお金があまりないが、安い夜行バスを使うのも嫌でどうしようか悩んでいたところ、SNで『あしながおじさん』にいいバスのいい席取ってあげるよ、と言われたのだ。

代わりに指示に全て従って欲しい、と言われたが。

予想より立派なバスに乗って自分の席についた真子は、隣に来る人を待っていた。その人が『あしながおじさん』なのである。そわ

そわしながら待っていると、出発の五分前に隣の人はやってきた。ぱち、と目があつてにこ、と微笑みかけられる。その人は、どこにでもいそうなサラリーマン風の中年だった。

（本当にこの人が……？）

真子は訝しがったが、バスは動き始めた。

そして、隣からスマホがずい、と差し出される。指示が来たのだ。はっとして真子がそれを見ると、そこにはこう書かれていた。

『オナニーして』

なるほどね、と真子は思った。

女子高生相手に金銭的援助をする人なんて、身内でなければほぼ確実に身体目的だ。つまり援交。このあしながおじさんに声をかけられた時も、そうなんだろうな、と真子は思っていたので、特に嫌

悪感もない。なにせ、真子は援交慣れしていたのだ。

思い切りよく、真子は着ていたTシャツを胸の上まであげた。高校生にしては大きめの胸がキツそうにブラジャーに包まれているので、真子は後ろのホックを外してブラジャーも上にずらす。ぶるんっ♡ と出てきた白く柔らかそうな乳房はやはり大きくて、乳輪は少し大きめだった。

隣の男が身を乗り出さないように気をつけながらも、真子のことを凝視しているのがわかって、真子は少し笑った。

このバスは一席ごとに横にカーテンがあって、座席の背もたれが高いので、ほぼ個室のようになっていて。右の一行だけは離れていて、左と真ん中の二列は、ほんの少し開いているもののくつつききみ。そのため、真子と男の間のカーテンを開いていれば、二人だけ

の空間が出来上がるのだ。

「んっ……♡」

ふにょふにょ♡ と自分の手には溢れてしまふ乳房を揉みながら乳首を指先で擦って、真子は鼻から抜けるような声を出す。いくら個室のような状態だとは言え声は筒抜けなので、なるべく小さな声にしているが、それもまたエロかった。

「は、あっ……♡」

くりくり、と乳首を摘んで転がすと、甘い痺れが腰の方へ広がっていく。真子は目を閉じて快感に集中した。

「ふうっ……♡」

周りにはたくさん人がいるし、隣ではさつき会ったばかりのおじさんがガン見しているのに、オナニーなんてしてしまっている、

というのもスパイスとなって、真子は余計に感じてしまう。

もう乳首はビンビンに勃起している。さらに真子はパンツの中に手を突っ込んで、割れ目の上の方を軽くなぞると既に湿っていて、そこをくるりと撫でてからクリトリスを探し当て、親指でぐりぐり♡ と押し潰した。

「んゝツ♡」

ビクンつと背中が跳ねるが、なんとか声は抑えることができた。すると、隣の男がスマホの画面を見せてくる。

『パンツは足首まで下ろして』

続

叔父にバイブをハメられて電車に乗る

「あー、やっぱり、締めりがよくてイイマンコだなあ」

「さっさと、終わらせなさいよっ！ あんっ♡」

「生意気な口叩いててイイのかー？」

「やああんっ♡」

パンツパンツ！ と爽やかな朝には不釣り合いな音がとあるマンションの一室の玄関で響く。高校の制服を着てローファーローファーで履いた青山深雪あおやまみゆきは、玄関の扉に手を当てて尻を突き出すように立ち、ショーツを膝まで引き下ろされて恥部に肉杭を出し入れされていた。その光景を見て、男は満足そうに腰を振り続ける。

「んくう……♡ は、早く出しなさいよっ！ 遅刻するでしょっ！
ああんっ♡」

「今日は休んでもイイぞく？ おじさんも休むから、一日中セックスするかつ♡」

「するわけないでしょっ！ あっあっあっ♡」

深雪は父の弟である叔父の茂雄と二人で暮らしているのだが、茂雄の性処理をやらされていた。いつもは夜が多いのだが、今日は朝だった。

パンツパンツパンツパンツパンツパンツ♡

「あんっ、あんっ、あんっ、ああんっつ♡♡」

激しくピストンされながらクリトリスを押しつぶされた瞬間、ビクンっと身体が跳ねた。同時に膣内も痙攣して男根を締め付ける。

「うおっ♡ 深雪はやっぱり、クリが弱いなあ♡ 締め上げがすごいぞっ♡」

「うるさいわねっ！」

「そんなこと言っついていいのかあ？ ほれっ♡」

「んあああっ♡♡」

ぐりいっと思ひ切り押し潰されると、軽く達してしまった。

「おいおい、勝手にイったのかあ？ イク時はちゃんとやわらないとだめだっけ教えてるだろ？」

「はあ、はあっ…♡ だれが、あんたなんかにいっ…♡んああっっ♡♡」

達したばかりなのにごちゅんっ♡ と中を抉られて、深雪は腰を反らして喘ぐ。

「言ってくれないと、深雪がいったことわからないから、おじさん何回だつて深雪をイかせちやうぞ♡」

「ああん♡♡ や、あ♡♡ つよつ、んん♡♡…♡♡♡♡」

深雪はこの大嫌いな叔父に好き勝手されるのが悔しくて仕方がないのに、気持ちよくて声を抑えることができない。

ばんっばんっばんっばんっ♡

「んあゝゝ♡♡ またいつちやう♡♡ま たいつちやうからあ♡♡♡」

「よく言えました♡ ご褒美に、おじさんの濃厚チンポミルク、いっぱい注いであげるからな♡♡」

「あひ、まっへ、それは、あっ、あっ、あっ、ああゝゝゝゝゝゝっ♡♡♡♡♡」

痴漢専用車両で全裸拘束される

痴漢専用車両というものがある。痴漢をされたい人と痴漢をした人が集まる、ワインワインな車両だ。とある地方都市のとある線路で、一日に一本だけ、夕方の六時過ぎの電車の最後尾の車両が、その痴漢専用車両と呼ばれている。知っているのはこの電車を走らせている会社の職員一部と、駅員の一部と、痴漢に興味がある人の一部だけ。世界中探したってありはしないだろうこの痴漢専用車両は、毎日ありとあらゆる場所からその行為を求め、いつだって満員である。

その痴漢専用車両の通る駅のほど近い場所にある進学校に、楯たてい井

実乃は通っていた。真面目で大人しく、目立ちにくい生徒だが、大きな胸やむっちりとした太ももで、男性生徒や教師からはオナネタにされがちだった。本人はそんなことは知らないのが救いである。もちろん、実乃は痴漢専用車両なんて知らない。部活にも入っておらず帰りはいつも四時ごろなので、その電車に乗ることもなかった。

しかし今日は、委員会の仕事があつて、帰りがちようど痴漢専用車両のある電車に乗る羽目になってしまった。しかも、ホームに着くと、退勤ラッシュで混んでたら嫌だなあ、と一番空いてそうな一番後ろの車両の来る位置で電車を待つてしまった。

こうして、実乃は痴漢専用車両に乗ることになったのである。

（なんだか、男の人ばかりだなあ……）

電車に乗ってすぐ、実乃は電車の中のいつもとは違う空気に狼狽していた。女性はそばにいる自分とは違う制服を着た女子高生だけで、他はみんな男性だ。しかも中年ばかりで、若い人はいない。なんだか見られていような気もする。

「んんっ……♡」

俯いていた実乃は、女の子の声が聞こえてはっと顔を上げた。自分以外の唯一の女性だ。目を凝らすと、周りの男性らに身体を触られているのではないか。痴漢されているのだ。その痴漢は一人や二人ではないし、その子のスカートは捲られ、ワイシャツのボタンも外されている。

実乃は決して気は強くない。むしろ弱い方だし、引っ込み思案で人と話すのも苦手。しかし、痴漢されている女の子を放って置ける

ような性格も、していなかった。

「大丈夫ですかっ？」

「えっ……？」

人混みをかき分けて、実乃は痴漢されている女の子に声をかけた。その子は顔を真っ赤にさせて、うっすらと目に涙を浮かべている。ひどい、と実乃は思った。そして、その女の子の腕を引き、扉の方へ向かっていく。

「もう次の駅に着くから、一緒に降りよう？」

「えっ……？」

実乃の言葉に、女の子は困惑しているようで、視線が定まらない。怯えてるんだ、と実乃は思った。

そのすぐ後に、電車が止まったので、実乃は女の子と一緒に降り

ようと、女の子の背中を押した、が。

「困るよ君」

「きやつ……！」

腹に腕を回されて、それ以上進めなくなってしまった。実乃が驚いて目を見開くと、目の前で扉が閉まる。扉の向こう側で、女の子も目を見開いてこっちを見ていた。

そして、無常にも扉が閉まり、電車が動き出した。

「せっかく乗ってきていたのに、なんで邪魔をするんだい」

「あの子もかわいそうになあ、今頃きつと身体が疼いて仕方ないぞ」

続

痴漢されるのをクラスメイト達に見られる

「あれ、堀内じゃね？」

「ほんとだ」

「んん？ あれ………痴漢されてね？」

「えっ？」

とある高校に通っている男子高生の四人組、福永と黒岩と山田と齋藤は、朝の電車で、同じクラスの女子生徒がいるのを発見した。

名前は堀内結花^{ほりうちゆか}。大人しくていつも教室の隅で一人本を読んでいるタイプなのだが、地味な見た目の割に胸の大きさは派手で、一部の男子生徒——つまりこの四人からはオナネタにされていた。

その結花がポールに縋りつくように立って俯いているのでおかしいな、と思った山田がじっと見つめていると、スカートが捲れていた。後ろにいるサラリーマンがそのスカートの中に手を入れているのだ。つまり痴漢である。

「マジだ。すっげえ。痴漢、初めて見たかも」

「俺見たことある。けっこうあるよ、痴漢って」

「でも堀内がされてんの、やばくね？」

「あのオッサン、見る目あるな」

助ける気など毛頭ない四人は、周りには聞こえないような音量でこそこそ話しながらちらちらと結花の方を見る。オナネタが増えるぞ、と四人はニヤニヤしているのだ。結花は性格上痴漢に抵抗どころか「やめてください」と声を上げることもしないようで、ただ

ただ、顔色を悪くさせてうつむいていた。

「もつと近く行こうぜ」

「だな」

電車が止まって人が降りていくときに、四人は「痴漢も降りたらつまらないな」と思いつつ、結花たちに近づいて行った。もつと近くで見えたかったのもあるし、周りの人間が痴漢に気づいて止められるものつまらなかつたから間に入りたかつたのだ。幸運にも（結花には不運にも）痴漢は降りず、結花も逃げることはできなかつたよ
うで、痴漢行為は続けられていた。

「あ、堀内の太も見えんじゃん」

「うわー、エロ。堀内ってスカート長いけど、あんなエツロい太ももしてたんだ……」

「俺女子のプールの授業チラ見したから知ってる」

「は？ ずっる、俺も呼べよ！」

「男子がグラウンド走ってる時にトイレ行きますって抜けたから見れた」

「それトイレ行く目的変わっただろ」

そんな馬鹿な会話を交わしている間に、痴漢行為はエスカレーターし、結花のスカートの中でショーツが下ろされていることに気づいた黒岩がぎよつとした。

「ちよ、ちよ、ちよ、ちよ、あれ、あれっ」

「何バグってんの？ ……え？ あれ……」

「パンツ？ あれ、堀内のパンツ？」

「パンツ下ろされてんの？ ……ってことは、今、堀内のスカート

の中って……」

その先は誰も何も言えなかった。いつの間にか悪かった結花の顔色は真っ赤になっていて、ぎゅっと閉じられている目の端には涙が浮かんでいる。結花の後ろにいるサラリーマンの顔もうっすら赤くなっていて、その手は結花の足の間に入り込んで、動いていることが四人には見て取れた。つまり、結花の女性器が、直で触られているのだ。

その内に結花のポールに縋る手は更に強くなり、逃げるところか尻を少し突き出すような形になってしまっている。それはまるで誘っているようだった。

「……手マンされてんの？」

「い、言うなよそれ」

「堀内、感じてるよな……?」

「……痴漢されてるのに?」

結花が痴漢されていると気づいた時のテンションの高さからは一転、ぼそぼそと喋る四人は瞬きもせずじっと二人を見ており、股間にテントが張ってきている。

そして、流石のこの四人もぎよつとした。痴漢が自分のベルトをカチャカチャ言わせ始めたのだ。

「え、マジでっ?」

「電車でっ?」

続

新幹線で媚薬を盛られる

「ん、んん……♡」

「どうかしたかい？」

「い、いえ、何でもっ……んっ♡」

小泉菜穂は長期休みに一人で祖母の家に行った帰りの新幹線に乗っていた。隣に座っていた人と後ろの二人が三人グループだったらしく、座席を回転させて四人で向かい合っている。三人の中年は初め菜穂に迷惑かと不安そうにしていたが、菜穂が快く受け入れてくれたので、四人で和気藹々と話していたのだ。

途中で三人から飲み物をもらい、それを飲み干したあたりから、

菜穂の身体はなんだかおかしくなってきた。

端的に言って、それは媚薬だったのである。

「んあっ♡」

隣の男にするり、と太ももを撫でられて、菜穂の太ももがピクリと震える。

「あれ、体温が高いみたいだけど……」

「もっと水を飲んだ方がいいんじゃないかな？」

「は、はひ、んむうっ……♡」

媚薬の入ったジュースのペットボトルを無理矢理口の中に入れて、菜穂は顔を真っ赤にさせながらそれを飲む。

「おやおや、こぼしちやってるよ」

「んやあっ……♡」

口の端からこぼれたジュースが胸を濡らしたのを見て、隣の男は鼻の下を伸ばしながらそこを拭った。

三人の男たちは好き勝手菜穂の身体を摩りだした。最早ただの痴漢スケベオヤジたちだ。しかし媚薬のせいでそれだけで強く感じてしまっていて、全く拒否ができない。せめて一回離れないと、と、菜穂は全く尿意は催していないが、トイレに行こうとした。

「わ、私、んんんっ……♡」

「ん？ どうしたんだい、もじもじして？」

「トイレかな？ おじさんが一緒に行つてあげようか？」

「い、いえ、一人で、いけます……んんんっ……♡」

なんとか立ち上がる菜穂の足元はよたついでいて、一人の男が立ち上がって横から抱くように菜穂の腰を支える。

「んんんっ♡」

「おじさんが連れて行ってあげるからね♡」

せっかく離れようと思ったのに意味がない、と思いながら、菜穂は腰を撫でる手に感じて足が震えてしまう。

同じ車両にいた男たちになつとりとした目で見られていたことを知らず、菜穂は男に支えられてトイレに向かった。

「ああ、全部閉まつてるねえ。もう一つ先の車両に行くかい？」

「あ、あの、私、一人で大丈夫ですから……」

菜穂に無理やりついてきた男は、もちろん媚薬を飲ませたのは確信犯であるから、ニヤニヤしながら菜穂を見下ろしていた。話の中で菜穂が高校生であるとは聞いていたが、高校生にしてはエロ過ぎる身体なのだ。菜穂は身体が昂って仕方がなくて、男の視線など気

にしている余裕はなかった。

「はあ……♡ はあ……♡」

「菜穂ちゃん、辛そうだねえ。具合が悪いのかな？」

「さわっ、ちや、だめ、え……♡」

外への扉前のスペースでしゃがみこんで自分の身体を抱きしめる菜穂の肩をねっとり撫でる男は、「もう少しだな」と思っていた。この媚薬はかなり強力なのだ。

「暑そうだね。お洋服脱ごつか」

「あっ……♡ まってえ……♡ やああっ……♡」

続

痴漢短編集

～モブに痴漢されているのにおねだり
してしまうJK達～_sample

2022年1月12日発行

♡ どん丸／がら堂

♡ Twitter : @donmar18